

# バルデス・レアルの二大ヴァニタス画 —— カリダード兄弟会の理念とイエズス会の思想

豊田 唯 (早稲田大学)

バロック期のスペインでは対抗宗教改革の理念を背景として宗教画の制作が隆盛を極めるが、なかでも独自の発展を遂げたのがヴァニタス画である。それ以前には総じて肖像画の片隅や裏面に描き込まれる程度であった頭蓋骨などのヴァニタス的モチーフは、17世紀に一つの絵画ジャンルとして独立し、その画面ではより直接的かつ具体的に現世における栄華が否定されるようになった。

フアン・デ・バルデス・レアル (1622～1690年) により 1672年に描かれた《束の間の命》と《この世の栄光の終わり》は、同世紀のスペインにおけるヴァニタス画の発展を代表する対作品として知られる。両絵画は迫真的なリアリズムのもとに骸骨や腐乱した死体を鑑賞者へと提示し、「神の家」である聖堂には一見不適切な様相を呈する。しかしそれらはセビーリャ、サンタ・カリダード聖堂の入口付近に相対して飾られ、聖堂装飾プログラムの一環として組み込まれた。同時代のスペインではそのような事例は他に認められないことから、同聖堂におけるヴァニタス画の導入には特別な理由が存在したはずである。

本発表の目的はその解明を試みることにあるが、それにあたってはまず、当時の聖堂を独占的に所有していたカリダード兄弟会を概観したい。同兄弟会は貧者への物質的、精神的援助を通じて自身の内における「慈愛 (Caridad)」の充積を目指す一般信徒集団であり、従来の解釈によれば両絵画は、キリスト教徒が死後の救済へと至るためには何よりも慈愛が必要であることを提起する。しかしながら、その理念を表明する媒体としてヴァニタス画が選ばれた理由については、未だに十分な議論が重ねられていない。

そこで本発表では第一に、当時の聖堂で兄弟会に授けられていた説教の概要を提示し、それが両絵画の表現と内容的に符合することを明らかにする。そしてそれを手掛かりとして、双方の画布に付与された機能を堂内の他作品との関係から再考したい。その試論においては、それらに隣接するムリーリョ絵画への導入部としてヴァニタス画を位置づけることになる。

一方で両作品にはこのようなカリダード兄弟会の哲学に加えて、同会長ミゲル・マニャーラ (1627～1679年) の個人的思想の表明が認められる。ただしそれに関する先行研究は、双方の絵画の図像学的典拠として彼の著書『真理の論考』(1671年)の一節を挙げながらも、その内容的相関については彼特有の死に対する強迫観念の表出を指摘するのみである。そこで本発表の後半では、同書の構想が明らかにイグナチオ・デ・ロヨラの『霊操』(1548年)から採られていること、さらには《この世の栄光の終わり》の核心部にイエズス会のモノグラムが挿入されていることを考慮し、2枚のヴァニタス画における同修道会の思想的影響を模索する。具体的にはマニャーラとイエズス会士たちとの緊密な関係を指摘したうえで、ロヨラの著書中で再三要求された「五官 (感) の活用」が、両絵画における兄弟会理念の伝達にいかん援用されたのかを明らかにしたい。